

通し番号	記入不要
------	------

分類番号	28-54-21-12
------	-------------

安定多収のためのトウモロコシ二期作の品種の組合せ	
<p>[要約] 1作目はRM100～118の9品種、2作目はRM115～135の5品種を供試した。1作目は、P9400は最も早く収穫期となり、P2088は、最も多収である。2作目は、7月25日の播種ではP2307、8月5日及び8月15日の播種ではKD731が最も多収である。さび病が発生し、P1690及びP2088は他の品種より発生程度が大きい。</p>	
畜産技術センター・企画指導部・企画研究課	連絡先 046-238-4056

[背景・ねらい]

温暖地におけるトウモロコシ二期作の安定多収栽培のため、従来のトウモロコシ二期作に比較して2作目の播種を1週間前進させる栽培体系を確立するため、1作目及び2作目品種の組合せについて検討する。

[成果の内容・特徴]

- 1 1作目は、4月1日に播種して、7月20日～8月1日に全て黄熟期で収穫し、乾物率は27.4～31.7%であった。P9400は、7月20日に収穫し最も早く収穫期となり、乾物収量は2,224kg/10aであった。P2088は、8月1日に収穫し、乾物収量は2,887kg/10aと最も多収である（表1、図1）。
- 2 2作目は、7月25日の播種では、10月26日～11月7日に全て黄熟期で収穫し、乾物率は27.8～38.7%であった。P2307は、乾物収量が1,508kg/10aと最も多収である。8月5日の播種では、11月21日～11月28日に全て黄熟期で収穫し、乾物率は22.3～28.3%であった。KD731は、乾物収量が1,387kg/10aと最も多収である。8月15日の播種では、P1690は黄熟期、P2088及び30D44は糊熟期、KD731及びP2307は乳熟期で収穫し、乾物率は19.5～25.1%である。KD731は、乾物収量が976kg/10aで最も多収である。さび病が発生し、P1690及びP2088は他の品種より発生程度が大きい（表2、図2）。
- 3 乾物収量が最も多収となる組合せは、P2088と8月5日播種のKD731の組合せで、年間乾物収量は4,254kg/10aである。2作目の播種期を1週間早めた組合せでは、P9400と7月25日播種のP2307の組合せで、年間乾物収量は3,732kg/10aである。

[成果の活用面・留意点]

- 1 2作目として早生品種を利用する場合は、7月下旬及び8月上旬に播種した場合にはさび病が発生しやすいため播種期について注意する必要がある。

[具体的データ]

表1 試験圃場における1作目トウモロコシの収穫日、熟度及び乾物率

品種	RM	収穫日	ミルクライン	乾物率 (%)
KD510	100	7/29	5	31.1
P9400	100	7/20	4	27.8
LG3457	100	7/25	4	31.7
TX1235	105	7/25	4	27.4
LG2533	105	7/25	4	28.6
34N84	108	7/29	5	29.9
LG3520	110	7/29	5	29.4
P1690	115	8/1	5	29.8
P2088	118	8/1	4	29.7

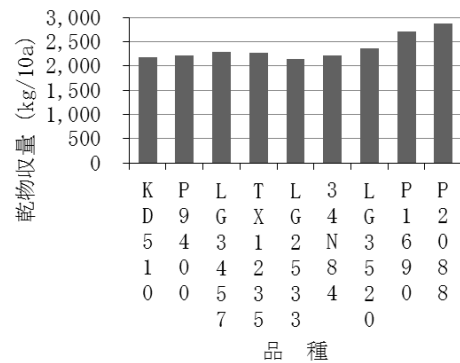


表2 試験圃場における2作目トウモロコシの収穫日、熟度および乾物率

品種	RM	7/25播種			8/5播種			8/15播種		
		収穫日	ミルクライン	乾物率 (%)	収穫日	ミルクライン	乾物率 (%)	収穫日	ミルクライン / 熟期	乾物率 (%)
P1690	115	10/26	5	38.7	11/21	3	25.2	11/29	1	25.1
P2088	118	11/2	5	31.8	11/21	1	22.5	11/29	糊熟期	23.8
KD731	123	11/2	3	27.8	11/28	1	22.3	11/29	乳熟期	19.5
P2307	125	11/7	2	30.3	11/28	1	23.5	11/29	乳熟期	23.1
30D44	135	11/7	5	34.9	11/28	2	28.3	11/29	糊熟期	23.7

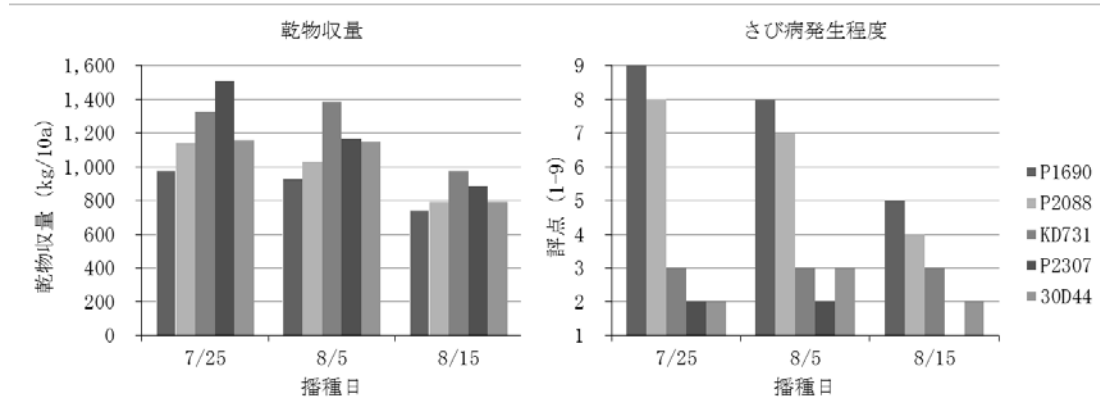


図2 試験圃場における2作目トウモロコシの乾物収量およびさび病発生程度

- [資料名] 平成 28 年度試験研究成績書
- [研究課題名] 不耕起対応高速播種機を活用したトウモロコシ二期作の安定多収栽培技術の開発
- [研究内容名] 組み合わせ品種の検討
- [研究期間] 平成 27～29 年度
- [研究者担当名] 折原健太郎、橋村慎二、山本和明、坂上信忠
(共同研究：普及指導課)